

論 文

〈声なき少数派〉による自己表現の検討

～多胎育児体験の映像作品化～

越 智 祐 子

同志社女子大学
現代社会学部・社会システム学科
助教（有期）Study on self-expression of a silent minority
through a movie on childcare in cases of multiple births

Yuko Ochi

Department of Social System Studies,
Faculty of Contemporary Social Studies, Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Assistant Professor

1. はじめに

多胎育児（ふたご、みつご等一度の出産で複数児を得た場合の育児）は、単に子どもの数の多い単胎育児ではない。しかし多胎育児と単胎育児の違いは、ひとつひとつは小さな差異であり、専門家や支援者からも見落とされがちである。多胎育児者たちはこれまで、少数派である当事者の仲間内ではサポートしあってきたものの、必ずしも積極的に外部に対して、多胎育児の特徴や支援の必要性について主張できてきたわけではない。本研究は、当事者が感得しているニードから出発して、〈声なき少数派〉による自己表現を試みることに関するアクションリサーチ^注である。

2. 研究の背景

2.1 多胎育児支援の現状

多胎育児の過酷さはこれまで、心身のつらさ（寝る間もなく、閉じこもっていて気が滅入る等）・経済的な負担・ケア技術習得の困難（同時授乳等）として整理されてきた。当事者の負担感は一般に高く、児童虐待のリスクも単胎育児者に比較して高いとされる（Ooki 2013）。

しかし、多胎育児への社会的支援の必要性については、必ずしも周知されているとは言えず、多胎育児に焦点を当

てた制度化はほぼされていない。多胎育児者の過酷さや困難さが、なにかのきっかけで認知された場合、例えば滋賀県湖南市の多胎児家庭育児支援事業のように制度化されることはあるが、全国的には必ずしも認知されていないのが現状である。では、多胎育児支援は実施されていないのかといえば決してそうではなく、当事者によるピアサポートが提供されている地域もある。ピアサポートは一定の成果を挙げているが、基本的には当事者のボランティアな活動であり、地域格差が大きい。基本的な支援は、地域にかかわらず提供されるような制度化がなされることが望ましい。ではなぜ、多胎育児支援の制度化はすすまないのだろうか。

多胎育児支援がピアサポートを中心として実施されており、制度化がすすまない背景には、多胎育児の負担（感）が多胎育児者同士では特別に言語化しなくても了解・共感可能な一方で、多数派の単胎育児者や専門家には理解が難しく、具体的な支援行動に結びつき難いことが考えられる。Bradshaw（1972）は、福祉ニードを専門家的な視点からみた「規範的ニード」「比較ニード」および、主観的なニードである「感得されたニード」「表明されたニード」の4つに分類した。「規範的ニード」とは、支援専門職等がなんらかの価値判断や科学的基準に照らして「望ましい」と考える状態と、当事者の現状とのかい離である。また「比較ニード」とは、他の同様の条件の人々が支援を受

けているならば、そこには（本人が表明していなくても）規範的ニードがあると判断することである。行政による支援の制度化は、数値により示された「規範的ニード」や「比較ニード」を根拠として求めることが多い。

これに対して、多胎育児支援の特徴は、多胎育児やピアサポーターといった当事者たちにはニードが感得される一方で、専門家からは、支援の必要性は高くないと判断されているタイプのニードであることだ。なぜこのように、支援の必要性の認識が当事者と専門家と違っているのだろうか。要因のひとつは、単胎育児者や専門家が、多胎育児を単胎育児と同じものだと考えているのに対して、多胎育児当事者たちは異なるものだと実感しているという相違にある。多胎育児者は、周囲からよく言われることとして「子育ての苦労はみんな同じ」「いっぺんにすむから、年子よりまし」といったことばを挙げるが、このことは、単胎育児者や専門家が多胎育児を、数の多い単胎育児だとしてとらえていることを端的にあらわしている。このように、多胎育児者を単胎育児者と同様の条件下にある人々であると認識するならば、比較ニードは見当たらないことになる。

近年は、一般家庭の子育てに対する社会的支援の必要性が注目され、地域子育て支援拠点の整備がすすんでいる。ニードを感得した当事者は、行政や拠点へ出向き、相談することによりニードを表出できる仕組みができていのである。また母子保健制度は、ハイリスクとされる母子をスクリーニングする仕組みを持っている。専門家が低体重や発達障害、産後うつ等の規範的ニードを発見することで、支援は提供されるのである。このため、多胎育児者への支援は、母子の心身や状況に特別の特徴がなければ、多胎育児の負担（感）は、単に子ども数の多い「単胎育児の負担（感）」と考えられ、専門家による介入の根拠を失う。単胎育児と多胎育児を同じものだと考えることで、社会的・制度的支援を想起しづらくなっているのである。

2.2 多胎育児と単胎育児の質的な相違

多胎育児を単胎育児と同じものだと考える一般的な理解は、両者の相違を量の違いとして理解することと同じである。これに対して、両者の相違は質的なものでもあるという主張が、当事者支援団体および研究者たちによりおこなわれてきた。例えば日本多胎支援協会は、地域の子育て支援者をメインターゲットにした「多胎育児支援研修」プログラムの開発を2011年度からおこなっている。開発が企画された背景には、①多胎の経験は妊娠中から単胎の経験とは異なること、②多胎育児家庭は外出困難を抱えているこ

と、③やっとの思いで出かけた先の支援拠点で、多胎育児者はより孤独を感じる事例が少なくないこと、等である（日本多胎支援協会 2012）。また、越智祐子と横田恵子は、多胎育児の特徴として、①複数児の順序づけが困難で、「平等」への気遣いが育児者に強く見られること、②一般に、育児の暗黙の基準は単胎のものだが、多胎育児の実際とのあいだには「ズレ」があること、③この「ズレ」は、多胎育児者にとっては「なにか違う、うまくいかない」という孤独感や無力感として作用する一方、周囲には気づかれておらず、多胎育児への無理解につながっていること、等を明らかにした（越智・横田 2011）。

以上のことから、多胎育児と単胎育児を同じものとして扱うことは不適切であり、多胎育児者たちへの無理解そのものであることがわかる。多胎育児の困難さは、養育者の心身の負担が大きいことや経済的負担が大きいことだけでなく、社会関係上の誤解や無理解としても立ち現れるのだ。周囲から理解されないことは、多胎育児者にとっては大きな問題であり、困難なのである。

理解を求めるため、日本多胎支援協会は研修を実施しているが、同じ目的で本研究が目指すのは、多胎育児者たちの「なにか違う」ということばである。

多胎育児者たちへのインタビュー経験の中で、何度も「ことばではうまく言えない」という〈ことば〉を聴かされた。このことは、多胎育児者たちにも、自分たちの負担（感）の要因を言語化できてはいないことを示している。他者への説明のことばを得ることは、支援を求める根拠を得ることに他ならない。そこで本研究では、多胎育児の当事者自身が主体的にかかわって、多胎育児の特徴について第三者に説明できるツールおよびプログラムの開発を試みた。

2.3 援助要請の生起過程モデルと受援力

高木修は、援助要請が生起する過程を図1としてモデルで示した（高木 1997）。本研究ではこのモデルを用いて、多胎育児の特徴に関する研修プログラムの開発と実施をおこなう。高木（1997）によれば、援助要請はまず、①己の問題への気づきから始まる。次に、②問題の重要性と自分の能力についての判断がおこなわれる。問題が援助を求めるほどのものではないと判断されると問題は棚上げされる。また、自己解決が可能だと判断されると、自分で対応することになる。さらに、③問題が重要で自己解決が困難な場合に、本当に援助要請をおこなうかどうかの意思決定がおこなわれる。このとき、援助を要請する、あるいはしない

ことによる損益の見積もりがなされる。援助要請の意思決定がおこなわれると、④潜在的援助者を探し、適切な援助者が得られそうであれば、⑤要請方策を検討する。直接依頼するのがよいのか、第三者を介するのがよいのか等、相手が要請に応じてくれるような方策を探すのである。方策が得られれば、⑥援助要請が実行される。本研究で検討するのはこのうち、「自己の問題への気づき」、「要請方策の検討」、「援助要請の実行」の各フェーズである。

「自己の問題への気づき」について、多胎育児者は自己の問題に「なにか違う、うまくいかない」という形ですでに気づきは始めている。必要なのは「なにか違う」の「なにか」とは一体何なのか、そして「なぜ」うまくいかないのか、を説明できることである。そこで、本研究では自分たちが困難を感じていて、周囲の理解と支援を求めたいことはなにか、という議論から始めた。また、「うまく言えない」ことを伝えるために、映像作品の製作を表現方法として選択することにした。「要請方策の検討」については、

個別具体のケースで支援を要請するのではなく、間接的な要請のかたちを採用することにした。具体的には、研修プログラムを開発し、子育て支援職等に受講してもらうことである。そして「援助要請の実行」では、実際に研修を実施した。

本研究は、当事者による表現を重視する。現在の日本では、多胎出産は全出産の1%程度だとされる。これまで積極的に主張してこなかった多胎育児者たちは、いわば〈声なき少数派〉である。表現は、一義的には支援要請のための試みだが、同時に、多胎育児者たちの受援力向上へのチャレンジでもある。受援力とは、災害時のボランティア活動の受け入れや要請について最近使われるようになった用語で、支援を受けるための環境や知恵のことと言われている（内閣府 2010）。大規模自然災害時には、支援しようという気持ちはあるが、コミュニティのようすや地理的条件といった被災地の環境に関する知識をほぼ持たない人々が外部から支援に駆けつける。過去の事例では、外部から

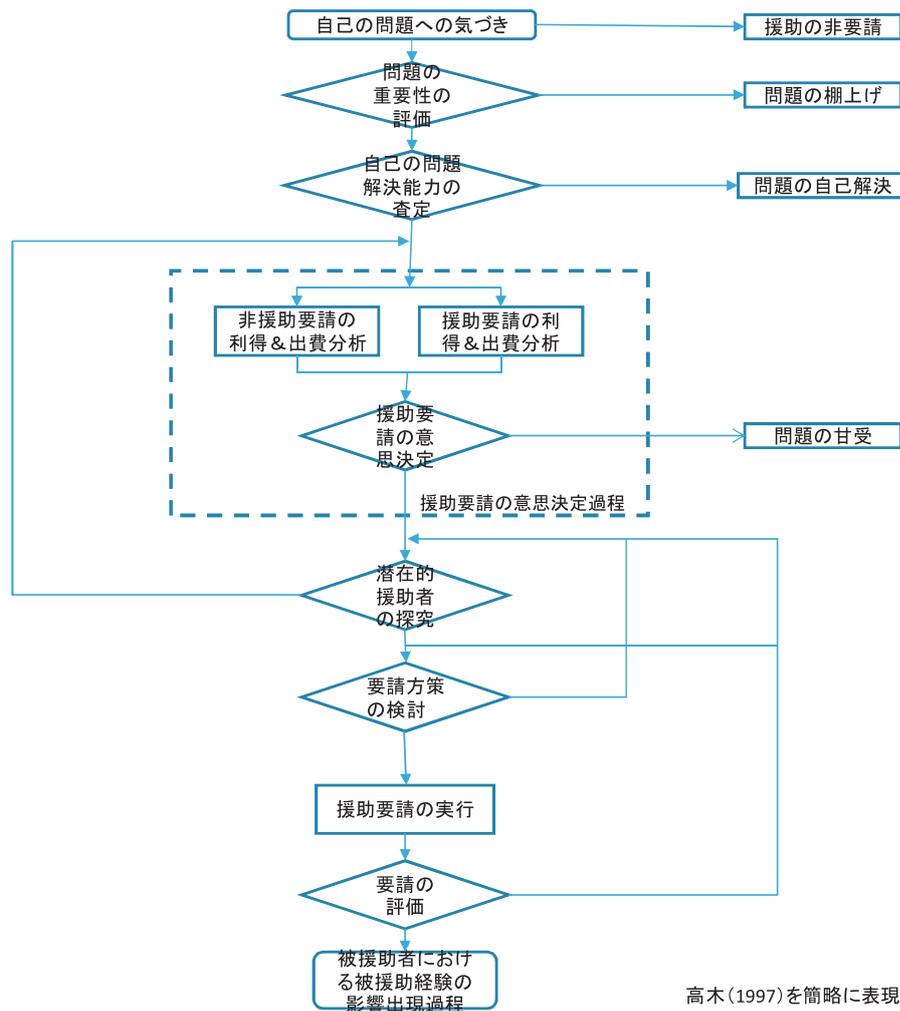


図1. 援助要請の生起過程

の支援を十分に活用できない場合があったり、被災者とボランティアとのあいだにトラブルが発生したりした。支援は一方的な行為ではないことから、支援者の姿勢だけでなく支援の受け取り手の姿勢を強調し、支援を効果的に引き出すという受援者側の知恵に注目するのが受援力だと言える。本研究は、この受援力の考え方を多胎育児支援のフィールドに援用する。つまり、自分たちの問題を支援者となりうる人たちに的確に伝え、理解を求めることで支援を引き出す仕組みを構築する過程を通して、多胎育児者の受援力の向上を期待する。

3. 方法

ここでは、方法について述べる。本研究は大きく分けて、①映像作品の製作、②研修の企画と実施、という2つの方法を用いているが、本稿では紙幅の都合から、②研修の企画と実施については方法の概要のみ紹介し、映像製作作成過程についての分析をおこなう。

A県B市の多胎育児支援グループCに、筆者から「みなさんが『なにか違う』と感じておられる内容をできるだけ理解したい。このままでは、わたしだけでなく、他の人たちにも知られないままです。多胎育児の特徴を周囲の人にわかってもらえるような工夫を考えてみませんか」と呼びかけ、賛同を得た。方法については、筆者から『「うまく言えない」のなら、映像作品で表現してみませんか」と提案し、快諾された。あわせて、本プロジェクトはアクションリサーチとして実施され、「同志社女子大学『人を対象とする研究』倫理規準」を遵守することを説明し、同意を得た。したがって、以下のすべての実施過程は、グループCメンバーとの協議を経て意思決定され、実行されたものである。

なおグループCは、同じB市内で活動する多胎育児サークルDの支援を主な活動とする任意団体で、メンバーは全員ふたご以上の多胎児を育てている女性である。サークルDには主として未就園の親子が集まっている。サークルDでおこなう支援とは、自分たちが親子で参加していたサークルDに、子どもが就園・就学してから「先輩ママ」として出向き、相談に乗ったり、子どもの見守りをおこなったりするピアサポートである。

3.1 映像作品「知ってほしいふたごの子育て～ふたごと過ごすホントの日常～」の製作

グループCのメンバーは十数名いるが、実質的に映像

作品製作に関わったメンバーは12人である。これ以外のグループメンバーも、プレビュー等のなんらかのかたちで関わっている。グループメンバー全員が、すでに就園・就学したふたごの母で、サークルDへの参加経験がある。製作は通常のグループCの活動と平行しておこなわれた。月に1度程度の会合を開き、①体験の共有、②シナリオの検討、③撮影、④編集、⑤プレビュー、⑥プレビューの反応をふまえた内容の再検討、⑦撮影の追加と編集、という過程を経て、15分30秒の完成に至った。

約15分間の作品の構成は、前半が、メンバーへ妊娠中や子どもが小さかった頃の経験を問うインタビューで、後半は、ふたごを連れて、友だちとスーパーで待ち合わせに外出するドラマとなっている。技術的な事柄については、プロの映像作家にアドバイスを依頼した。製作期間は2011年4月から2012年5月までの13ヶ月間である。

3.2 研修の企画と実施

作品完成後、活用方法について話し合った結果、一方的に観てもらっただけではなく、作品を観てくれた人と直接話す機会が欲しいという意見が出た。そこで、作品上映を含む90分間の研修プログラムを作成することにした。内容は、ミニ講義、作品の上映、ディスカッションである。講義内容は筆者が組み立ててメンバーに提案した。主な研修対象者を子育て支援に関わる支援者と設定し、B市行政を始め、日本多胎支援協会の会員メーリングリストへの掲載、新聞社への取材依頼等の広報をおこなった。結果、表1に示すとおり、研修会を8箇所で開催できた。実施に先立って、A県多胎ネットスタッフに講座の提供をおこない、意見を求めた。実際の研修の運営は、メンバーが平均3名程度参加し、役割を分担して担当した。参加したメンバーは講義からディスカッションのコーディネーターまでをおこなった。筆者は補完的役割を担った。

4. 分析と考察

4.1 場面と手法の選定

多胎育児の難しさやつらく感じたこと、特徴についてメンバーに記憶をたどってもらった。過去を振り返ったのは、現在は現在で悩みがあるが、心身ともに困憊したのは、0～2歳くらいの低年齢児の世話だったということによって一致したからである。その結果、さまざまな意見が出たが、2歳くらいのふたごを母親がひとりでも外へ連れていく場面を取り上げることにした。子ども連れの外出は一般に困難だが、

表1 研修会実施一覧

	実施日	対 象	メンバー数	参加者数
1	9月18日	O市保健師・助産師（・多胎育児者）	1	20
2	9月25日	P市保健師・助産師・支援者（・多胎育児者）	3	29
3	10月22日	Q大学学生	6	23
4	12月11日	R大学学生	6	128
5	12月18日	S市保健師・助産師（・多胎育児者）	4	14
6	1月31日	T市保健師・助産師	4	17
7	2月7日	助産師・子育て支援者（・多胎育児者）（U県）	2	19
8	2月19日	保健師・助産師・子育て支援者・多胎育児者（V県）	2	31
	合計		33	281

ふたご連れの場合は準備段階が大変であること（写真1）、外で声をかけられる回数が圧倒的に多いこと、横型のふたご用ベビーカーで利用できる歩道やエレベーターは限られているため気が抜けないこと等が指摘された（写真2）。

外出場面が採用されたのは、単胎育児と多胎育児が「似て非なるもの」であることの表現が容易であること、助けてもらいたいと思う瞬間が多いためだと考える。撮影の難しさから断念されたが、乳児健診は外出先としての難易度が高いと認識されていた。同一月年齢児が集まる場面で、ひとりを扱うこととふたごを扱うことの違いを、痛感させ

られるからだと考えられる。

また、ドキュメンタリーで表現するのか、ドラマで表現するのか、手法の選択についても検討をおこなった。結果、ドキュメンタリーの製作は、現在渦中の2歳程度のふたご親子の全面的な協力が不可欠だが、負担が大きすぎると判断された。そこでドラマを製作し、現実を再構成することとした。「とてもではないが、今大変な状況下にあるお母さんに依頼することはできない」という意見や、「手助けの代わりに撮影はできない」等の意見があった。

以上の選択過程から、メンバーは自分たちの体験として「大変だった」と振り返る「当事者」として自分たちを捉えていると同時に、「今大変な人たちが直接言うことはできないから、わたしたちが言う」というセルフアドボカシー機能を果たしていることがわかる。

4.2 「どっちがお兄ちゃん？」

ふたごやみつご連れの外出では、たくさんの人から話しかけられる。これは、多胎育児者に共通の体験である。話しかけられること自体はありがたい、うれしい体験だと語られるが、度重なったり、話しかけられる側の事情をまったく考慮していない場合や、とてもプライベートなことを初対面の通りすがりの人から尋ねられる場合がある。タイミングによっては、多胎育児者に非常なストレスを与える。「かわいいですね」を筆頭に、よくかけられることばの例としては、「一卵性ですか？それとも二卵性ですか？」「そっくりですね（あるいはあまり似ていませんね）」「どっちがお兄ちゃん（あるいはお姉ちゃん）ですか？」「不妊治療したの？」等があげられる。

これらの内容の特徴は、ふたごへの関心を、ステレオタイプ的な知識を披露することで表現していることだ。「ふたごはそっくりである」「ふたごにも戸籍上の出生順位がある」「不妊治療の結果多胎出産に至るケースが少なくな



写真1 外出準備の表現



写真2 エレベーターで頻出の状況

い」といったことがその代表例である。ひとつひとつは間違いとはいき切れないのだが、次項で取り上げる平等への感覚の違い等、多胎のリアリティとは必ずしも合致しない。この「すぐに間違いというわけではないが、自分には当てはまらない」というズレや、同じことを何度も尋ねられる徒労感、理解されなかった経験として、澱のように多胎育児者の胸の内に蓄積されていく。

また、ふたごへの率直な関心は、時にふたごを連れている保護者や、親子の状況への無配慮となる。相手はゆっくり散歩しているのかそれとも急いでいるのか、子育てを楽しんでいるのかそれとも行き詰まっているのか、多くの方はふたごに夢中になっており、サインを見過す。まさか相手が外出までに悪戦苦闘しており、泣きたい気持ちで急いでいるところへ、自宅から10分歩いてくる間に2度呼び止められ同じ質問をされている、とは想像できない。このことも、多胎育児者に、わかってもらえていない、自分とは向き合ってもらえていないという無力感を与えがちだった。

多胎育児者はこの状況に対して、正面から訂正したり異議を申し立てたりはしない。そのような余裕はないのである。「今日はこっちがお兄ちゃん、明日はあっちがお兄ちゃん、と答えている」と、質問はぐらかすことで防衛したり、「余裕がないとつらく感じるが、悪気がないことはわかっている」「ひとつひとつに向き合っていたら身が持たない」と受け流したりしているが、複雑な感情を抱いているのだ。

4.3 「平等」にしたい、「平等」にしなければならない

多胎育児とは、同じ月年齢の子どもを複数育てることである。したがって、単胎育児を複数回経験することとは質的に異なる部分が存在する。複数の子どもに同時に対応しなければならない、あるいは、同じケアを2度以上提供しなければならない、という量の違いは当然存在するのだが、多胎育児者が感じる負担感は順序に関するものである。多胎育児においては、複数児の扱いに順序が必要となるときにどのような判断基準で順序づけるか、ということが問題となり、小さな気苦労の積み重ねとなるのだ。単胎育児では複数の子どもの間には年齢の違いがあるので、順序が必要になるとき、単胎育児者は多くの場合で出生順位を利用する。このことの是非については議論の余地があるが、本研究ではそこには踏み込まず、指摘するにとどめる。

複数の子ども間に順序が必要になる場面は、日常生活の

中で決して少なくない。たとえば、子どもが同時に泣いた場合はどちらを優先して対応すべきなのか。子どもが同時に道路に飛び出し、違う方向へ走ってしまった場合、どちらを先に追いかけるべきなのか。子どもがふたりとも同時に甘えて寄ってきた場合、どちらを先に抱き上げるのか。このような場合、単胎育児であれば、複数の子どもはきょうだいであり、年齢が違う。このときは、「お兄ちゃん、ちょっと待ってね（危ないから止まって!）」と年長児に声をかけておいて、年少児に対応する手法を多くの場合で迷うことなく用いることができる。ところが多胎育児の場合は、子どもたちは同じ月年齢なので、言語的な指示の入り方にきょうだいほどの差はなく、「お兄ちゃんだから」という根拠を使うほど明確な順序はない。そこで、状況に応じた判断を、臨機応変におこなわざるを得ないことになる。具体的には、前回先に抱き上げた子には今回は少し待ってもらおう、あるいは、より危険な方から対応する、といったことで、ひとつひとつは小さなことかもしれないが、判断にはエネルギーが必要なため、積み重なると他の人たちと「なにかが違う」という違和感と、疲れがたまってくる。

加えて、日々の判断の積み重ねでは、なにが正解なのか明確でない場合も多く、自信を失ったり、子どもたちに申し訳ない気持ちを抱く多胎育児者は少なくない（写真3）。

申し訳なさを少しでも軽減するためには、月年齢が同じ複数の子どもをできるだけ「同じように」扱わなければならない。だから多胎育児者たちは、できる限り同じように、平等に子どもに対応したいと考えるのだ。多胎育児者たちの多くは、ふたごやみつごを「お兄ちゃん」「おとうと」とは呼ばない。順序はない、と考えているのだ。このような状況で、前項で検討した「どっちがお兄ちゃん？」の問いが発せられるわけである。尋ねる方はおそらく、「ふた



写真3 エレベーターのない集合住宅の表現

ごで同時だと言っても、戸籍上はまた違って順番がありますよね」くらいの認識だろうが、尋ねられる方は日々の育児実践において、できるだけ「平等に」と真剣に考えて行動しているために、努力や気遣いが理解されていない、と感じることになる。

4.4 「思っていると言えなかった。それどころではなかった」

映像作品の題材を選び、シナリオを作っていく過程で、多胎育児者の日常とは、日々の小さな疲労感、無力感が積み重なっていくことが浮かび上がってきた。作業中の話題で意見が一致したのは、「本当に大変だったあの頃には、思っているよりも言えなかった」「もう毎日が必死で、聞き流すしかなかった」ということである。これまで「何か違う」と感じてきた事柄は、ひとつひとつは些細なことで、日々の生活に埋め込まれている事柄である。「うまく言えない」のは、単に言語化されていないということだけではなく、ひとつひとつは些細な出来事であって、ことさら重要性を主張できない、ということでもあるようだ。しかし今回、自らの多胎育児体験を改めて振り返ってみようと、たくさんの共通の体験と、詳細な描写が出てきた。日常の些細なことも、積み重なることで一定の重みを持つことが改めて確認され、支援要請の意思決定へとつながったと考える。

5. おわりに

以上、多胎育児の特徴について、実際に多胎育児を経験している人たちによる映像表現の過程を紹介した。製作に関わったメンバーたちは、自分たちを当事者であり、また現在渦中にいる仲間の代弁者として位置づけていた。製作過程では、外出の場面での特徴について議論され、その中から、理解されていないと感じさせられる経験を日々繰り返すこと、個別の異議申し立てはおこなわれないこと、複数の子どもに順序をつけることは、かなり消耗する作業であること等が見えてきた。「育児」という概念のなかでは、ひとつひとつは小さな差異かもしれない上に、日常生活に埋め込まれることで、より違いは見えづらく、主張しづらくなっている。今回採用した映像による表現は、このような日常生活の現実を、12名のディスカッションを経て再構成し、クローズアップすることから、声なき少数派の声を増幅させるのに適した装置だったと評価できる。また、映像として表現するということは、常に視聴者を意識するこ

とに他ならない。自分たちの体験を客観視する機会ともなった。

製作を通じて、「一方的に視聴してもらうのではなく対話したい」という意見が出てきた。当事者たちが多胎育児の特徴や支援の必要性について「伝えたい、伝えるに値する内容だ」と判断できたことは特筆に値する。製作過程で何度も確認されたテーマは、「周囲の人たちに多胎育児の特徴を理解してもらって、ほんの少し気遣いを依頼しよう」ということだ。本稿で扱った自己表現の先には、研修会の企画と実施という、対話のフェーズが存在する。場所を変えて、議論したい。

注 矢守克也 (2010: 11) によれば、アクションリサーチ (action research) とは、「こんな社会にしたい」という思いを共有する研究者と研究対象者とが展開する社会実践のことである (矢守克也, 2010, 『アクションリサーチ: 実践する人間科学』新曜社)。

文 献

- Bradshaw, Jonathan, 1972, *A Taxonomy of Social Need* New Society 30: 640-643.
- 内閣府, 2010, 「地域の『受援力』を高めるために」 (<http://www.bousai-vol.go.jp/juenryoku/>)
- 日本多胎支援協会, 2012, 「『虐待防止のための連携型多胎支援事業』報告書」
- Ooki, Syuichi, 2013, *Fatal child maltreatment associated with multiple births in Japan: nationwide data between July 2003 and March 2011*, Environmental Health and Preventive Medicine
- 越智祐子・横田恵子, 2011, 「多胎育児の社会的困難: 母親へのインタビュー調査から」『神戸女学院大学論集』58(2), 65-78.
- 高木修, 1997, 「援助行動の生起過程に関するモデルの提案」『関西大学社会学部紀要』29(1): 1-21.

謝 辞

本研究は JSPS 科研費 22730429 の助成を受けたものです。

一緒に作品を作り研修会の企画と実施をおこなった、よき仲間の全員に感謝します。

